

令和5年度 桃陽総合支援学校 後期学校評価アンケート

個人情報の管理や安全に学校生活を送ることについては、教職員ができていると答えている。前期と同様に肯定的な評価を示す項目の中には、「できている」から「大体できている」とへと回答が変わっている項目が複数見られる。1年のまとめの時期を迎えると、「できている」と答えた教職員が増える傾向にあるようだ。

前期と比較すると、「不十分、できていない」という回答割合が、「わからない」を加えても減っている。年間の積み重ねの中で、子どもたちの変容を肯定的にとらえていただいているのではないかと考察する。その中にあっても「自主学習」が不十分との回答があり、「学ぶ姿勢の育成」に対する期待があるものととらえたい。

前期に比べると、否定的な回答数の割合がわずかであるが、減っている。行事や、日々の取組の積重ねで、「やりきった」「自分はこれができる」と感じることがあつたためと考える。また、人との関係においても、1年の後半を迎える、他者の良いところを認め、「自分とは合わなくて合わないだけ」というとらえ方ができる者が増えてきているのではないかと推察する。

前期とほぼ変わらない回答傾向であった。様々な行事の様子を見ていただく機会もあり、ICT機器の活用の様子も知っていただけたのではないかと実感する回答であった。

病棟では、常に院内感染がおこらないよう気を配られている。教職員も気を緩めることなく、対応していくことが求められる。

教職員は、今年度の取組について、肯定的にとらえている。

地域の資源を利用していただき、連携することで、児童生徒の変容が期待できるのではとも考えている。コロナが5類対応となったことから、さまざまな制限が緩和されてきている。特別支援学校（病弱）である桃陽では、感染症対策を十分行い、できるところから「地域交流」を再開させていきたい。

学校運営協議会の委員である地域の施設長からは、「感染症対策を行ったうえで、何か交流できることがあれば、機会を検討していきたい」とのコメントをいただいている。コロナ前の交流のスタイルにこだわらず、コロナの対応を経たからこそ考えられる、交流の進め方もあるのではないかとの提案もいただいた。

【全体を通して】

**確かな学力の育成:** 教職員が肯定的とらえている項目は、児童生徒の評価と一致している。放課後学習への参加の様子や、授業の出席状況を見ると、「わかる」「できる」を十分体感できていないことも懸念される。学校関係者からは児童生徒は「入院」という特殊な環境の中で教科の学習以外にも、様々な学びをしている。教職員には、「病気の時だからこそ学び」を展開し、大切にする専門性が求められる。学びの環境を整えること、個々の児童生徒に応じた個別最適な学びを提供できるように励んでほしい。とのコメントをいただいた。

**豊かな心の育成:** 昼夜を通じて同じ仲間と過ごす子どもたちにとっては、他者の存在が励みとなることもあれば、多少なりともストレスとなることもある。中学生くらいになると、思春期独特的不定愁訴も相まって、自分のコントロールが難しく、思いのままに行動したことにより、落ち着いてみると自己嫌悪に陥ったりする姿を散見する。病院・学校・保護者が連携を取り、外泊など環境を変えることもしながら、様子を見守っていくと良い。

**健やかな身体の育成:** 医療との連携もあり、自身の体調を把握し整えていこうとする姿勢は見られる。思い描く姿との差や、人との関りから生じる不安やストレスなど心理面での不具合に対し、どのようにすればよいのか持て余している状況がみられる。入院そのものが不安やストレスの多いものであることに立ち返り、自分の気持ちの納め方を取り出して学ぶ機会を継続的に取り組む。

**独自の取組:** 復学は、個別に、段階的に進めていく必要がある。児童生徒個々の、復学ストーリーを描く視点が求められる。児童生徒自身が「どうしたい」のか、入院中にできること、退院が決まった段階で進めたいことなど、これまでの事例を踏まえて整理しながら、担当者が共有できるように取り組んでいきたい。